

薬物乱用は「ダメ。ゼツタイ。」 (薬物乱用は人間社会を破壊する。)

(財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センター 企画部長)

阿部 俊三

はじめに

近年、大学生を中心に薬物乱用汚染が急激に拡大し、とくに、大麻(マリファナ)の乱用が顕著になっている。大学生、高校生の薬物乱用は、数年前から、学校の構内、クラブの部室、寮で行われている。彼らの薬物乱用は中学からタバコの喫煙、アルコールの飲酒からはじまり、シンナー乱用、MDMA、その他の禁止薬物の乱用へと拡大している。今日、IT革命により若者の間にインターネットの利用の急激な普及と同時に、インターネットによる薬物の不正取引も蔓延している。その結果、薬物が簡単に入手でき、

乱用が拡大している。なかでも、大麻の種子を購入し、自宅で不正栽培をし、それを大学の構内で密売をしている。もちろん 本人自ら大麻の吸引による薬物乱用に染まってしまっている。薬物乱用問題は、まず、マスコミを賑やかしており、とくに、タレント、スポーツ選手、有名人が逮捕された事件を取り上げることによるものですが、薬物乱用がなぜ異常に報道されているのか、薬物乱用の本当の恐ろしさについて論じることがありません。薬物乱用によって齎される人類への悪影響が認識されていないことが、大変重要である。

なぜ薬物乱用は「ダメ。ゼッタイ。」なのか。

薬物乱用がなぜ「ダメ。ゼッタイ。」なのか。二つの理由がある。

一つは、薬物を乱用すると私たち脳の中樞神経を侵し、脳を破壊してしまう。侵された脳は、どんな治療を受けても決して元の状態には戻らない。その弊害は一生ついてまわる。

二つ目は、一旦薬物乱用をはじめると自分の意思では、やめられない特徴がある。これを依存性という。薬物乱用で警察に捕まった時にはもう遅い。最初は、「面白半分」「友だちに誘われたから」ちょっととした好奇心から、最近では中学生が「ダイエットしたい」「やせたい」と薬物に手を染めるケースも増大している。

若者を取り巻く環境は急激に多様化し、家庭・学校中心から、メディア社会の影響を受けた不安定な精神を持った生活空間になっている。若者は、社会の一員としての自覚を持たず、家庭・学校の絆から外れかけているという実情がある。人間社会の絆、こころと身体の成長を最も必要とする時期に、全く相反する非社会的な行動をもたらす薬物乱用に簡単に取り付かれてしまい、その若者の未来は消え

てしまう恐れがある。

「一回ぐらいやったからもうダメだ！ なんてことはあるわけがないと思って薬物に手を染め、一度が二度、三度と薬物に手を染めてしまった」

薬物乱用者のほとんどが、このような手記をのこしている。薬物を乱用しはじめた当初は、自分は意思が固いから大丈夫だと自負をしていたが、一度手を染めると薬物から逃れられない恐ろしさが分かる。でもその時は、すでに手遅れになってしまっている。

薬物乱用には例外がない。どんな人間でも、一旦、薬物乱用に手を染めるとやめられなくなる。それは、規範意識の高いはずの警察官、学校の先生、大学教授、公務員らが薬物事犯で検挙されていることから明らかです。

一度乱用をはじめると、薬物乱用が進むにつれて、はじめての時の量では作用が効かなくなり、徐々に薬物の量を増やさないと効き目がなくなる「耐性」が生まれる。その結果、薬物を入手するために金が必要になる。乱用者になると、生活が「薬物中心」になり、薬物を手に入れるために強盗、殺人事件等、犯罪を犯したという事例が多数ある。また、数年前にアメリカを訪問したおり、コカイン・ベビーを視察する機会があり、コカイン中毒の母親から誕生

した子供をコカイン・ベビーといいます。丁度、二時間前に誕生したコカイン・ベビーを見ました。体重は僅か1ポンド（わたくしのこぶし二つほど）しかなく、口に顔半分

の太さの管で呼吸していましたが、担当医の説明によるとすでにコカイン中毒に陥って誕生してきており、あと三時間しか生きられないということでした。この世に生命を受けて存在したのは、おそらく五時間ほどです。母親は薬物中毒者ですので、子供を産み落とすと同時に、何処かへ去って行ってしまった。自分の子供に対する愛情は全く持っていません。こんなに悲しい人間が、薬物乱用によって存在している。子供には何の責任もありません。それは母親が薬物中毒者のため、僅か五時間この世の空気を吸っただけで、名前も付けられないまま亡くなってしまふ。その病院には同様の子供が数一〇人、パイプを加えて保育器に並んでいました。一方、廊下を隔てて反対側の病室では、母親が添い寝をした健やかな赤ちゃんが母乳を飲んでいました。本当に薬物乱用の恐ろしい現実を体験しました。

世界の薬物乱用状況

「大麻はタバコより害がない。」と大麻の乱用をすすめ

るような人がいるが、「大麻は、WHO（世界保健機関）の報告書（注）によると、記憶への影響、学習能力の悪化、知覚の変化、人格喪失などを引き起こす（脳の中樞神経を侵す）ほか、使用をやめても依存性がのこりやめられないとされている。」

（注）"Cannabis: a health perspective and research agenda"（一九九七）

Programme on Substance Abuse (WHO)
大麻（マリファナ）は国際条約で禁止薬物として規制されている。

国連薬物犯罪事務所（UNODC）によると、薬物乱用者は、世界に二億八千万人を超えている。世界人口（約六五億人）の四・〇％という恐ろしい数字です。

最も多いのは大麻で、一億六五〇万人、覚せい剤が二四七〇万人、コカインが一六〇〇万人、MDMA九〇〇万人、ヘロイン等麻薬一六五〇万人おり、我が国では、一五才以上の人口の四％にあたる三〇〇万人の乱用者がいると推定される。米国では一九五〇万人で、人口の七％が薬物汚染されているといわれる。

薬物乱用による密輸、密売の不正取引のブラック・マネーは年間一〇〇兆円。日本の国家予算が八六兆円、その予算

を超える金が人類を破滅へと追いやっている薬物乱用の脅威にさらされている。

麻薬戦争

日本の薬物乱用問題は戦後に始まりました。敗戦の憂き目に遭った国民は、国の復興に不眠不休で頑張った歴史がある。その時期に「眠気覚まし」として、ヒロポン（覚せい剤）が市販され、流行を呼んだ。それに便乗して国内各地に密造工場が「誕生」し、覚せい剤の乱用をもたらす結果となった。

同時に、この問題は殺人などの凶悪犯罪を増加させ、社会の秩序、国民生活を脅かすこととなる。そこで、法で規制し、全国の密造工場を壊滅することによって、覚せい剤乱用を撲滅させることができた。

しかし、高度経済成長期に入って、暴力団が薬物の不正売買に手を出し、第二次覚せい剤乱用期を招き、そして、乱用が一向に終息されないうまま、未成年者に薬物乱用が拡大し、今日の第三次覚せい剤乱用期を迎え、高水準で推移している。薬物の不正売買の方法は多様化し、携帯電話やインターネットなどを通じて売買されている。また、イラ

ンや東南アジアの不法滞在者が薬物を路上で売買しているが、そのバックは暴力団が介在している。

一方、南米では、麻薬マフィアが世界的ネットワークを持って国家に対抗している。米国でもマフィアが暗虐している。ロシアではアフガニスタンからの撤退、ソビエト崩壊後、麻薬に汚染された兵士が帰還し、国内に麻薬汚染が拡大すると同時に、モスクワの巨大マフィアが麻薬取引を行い、アジアからヨーロッパへの密輸ルートの中継地にもなっている。

米国ではクリントン大統領時代、南米コロンビアの麻薬マフィアから密輸されてくるコカインを壊滅するため、コロンビア、ボリビア、ペルーに軍を派遣して不正密造を壊滅する「麻薬戦争」をおこなっている現在でも米国は同様の壊滅作戦を展開しているが、米国内に薬物乱用者がいる限り、壊滅作戦は終結しない。薬物乱用防止は、薬物乱用者を新たに創らないことに尽きるからです。

薬物乱用防止は薬物乱用を許さない社会環境づくりから

薬物乱用防止対策で最も重要なことは、薬物を乱用していない人々に薬物乱用防止の正しい知識を啓発し、薬物乱

用に決して手を染めないように、薬物乱用は一回でも「ダメ。ゼッタイ。」を徹底する。そして、できるだけ低年齢層から薬物乱用防止教育を実施し啓発する。

麻薬・覚せい剤乱用防止センターでは、小学校五、六年生から中学生を対象に、薬物乱用防止キャラバンカーの巡回キャンペーンを精力的に実施している。キャラバンカーは特注の大型バスで、車内にパソコンゲーム、啓発パネル、立体映像、見学記念プリント等を搭載しており、全国で八台が活動している。

また、地域の健康祭り、イベント、学校を支える「母親の会」など保護者らの要請をうけてキャラバンカーを派遣し、子どもたちと一緒に薬物乱用防止教室を実施して成果を挙げている例も少なくない。

また、当センターでは、日本のライオンズクラブ国際協会と共同で薬物乱用防止教育認定講師養成講座を薬物乱用対策推進本部（本部長内閣総理大臣）、厚生労働省、警察庁、文部科学省の後援を受けて全国三四キャビネット単位で毎年開催し、すでに三万人の認定講師を養成している。

この制度は、ライオンズクラブのメンバーが養成講座を受講し、認定講師の資格を取得し、各クラブが近隣の学校に出向き、薬物乱用防止教室を開催している。年間二〇〇〇

校、三〇万人を超える生徒が受講している。この活動は、地域のリーダーであるライオンズクラブのおじさん、おばさんが学校へ出向いて、生徒、先生と信頼関係が生まれるとともに、地域を結んだこころの通じあう建設的な地域社会が創出されている。認定講師は地域の各種会合でも薬物乱用防止の啓発活動を行なっている。

まとめ

薬物は乱用することによって、その人の将来、未来がその瞬間から喪失されていくことになる。人間社会は互いに尊重し、平和な明るい社会の秩序を形成している。そうした社会を創るためには、こどものころからの健康教育が必要だ。こうした観点から、薬物乱用防止教室を実施し、現在病に取り付かれている子どもたちのこころの病を治し、こどもの未来に羽ばたくエネルギーを注入する活動を推進する。

とくに、現在の青少年は情報の暴風雨に晒されており、その結果、情報過多とサポートのない垂れ流しによる無責任情報等が成長過程にある青少年に微妙な影響をもたらしている現実がある。教育のマンネリ化等も少なからず影響

をあたえている現代、地域社会で活躍している、いわば、人生、社会のプロフェッショナル（達人）であるライオンズクラブのメンバーによる薬物乱用防止教室の開催は、子どもも未来に素晴らしい結果を生むことは確実です。子どもは、社会の中で自分なりの存在価値を持っているが、決して、突然成長し、大人社会の仲間入りが出来るものではなく、いつでも、大人が成長の段階に合わせてサポートして行かなければならない。そこには、無機質なサポートではなく、必ず、人による人のための触れ合い、愛が必要とされる。薬物乱用防止教育はこの人間健全成長に最も欠かせない要因を包含している。

薬物乱用防止啓発活動のポイントは、従来の恐ろしい、脅迫的な脅しによる予防対策はあくまでも薬物乱用者を想定した発想であって、むしろ逆効果になる。薬物乱用問題は、現代社会の深刻な問題として、存在しているわけですから、全ての人が共有できる活動としなければならない。その意味では、今までのスタイルを一掃して、新しい方法で若年層から積極的に推進していくことが重要です。